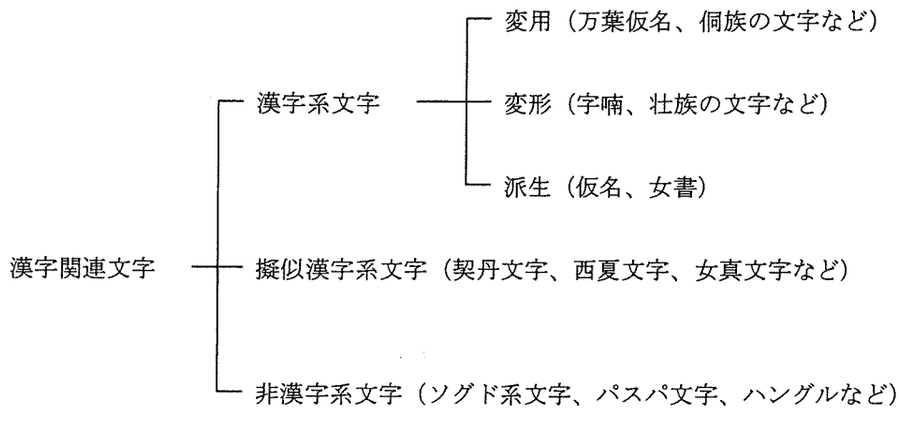
漢字関連文字の諸相

吉池孝一

1. 漢字関連文字

古今の使用文字を書き入れた東アジア一帯の地図を眺めると、そこには特徴を異にした数多くの文字がある[1]。地図上の文字はただ並立しているのではなく、互いに関係を持ち、同時に幾つかの主要な構造の中に位置づけられる。その構造の一つに、漢字（狭義の漢字。漢語および漢語の祖先を表記した文字）とそれ以外の文字、すなわち中心と周辺がある。漢字は、紀元前 1300 年頃の甲骨文字より現代の簡体字に至るまで、三千数百年にわたり東アジアの文化を支える柱であった。周辺の民族は、漢字で書かれた情報や、情報伝達の道具としての文字を求め、柱たる漢字に近づいた。その接触の過程で、漢字に由来する文字や漢字と関連のある文字を使用するようになった。そのような文字群を「漢字関連文字」という枠組みに収めて分類すると次のようになる[2]。



漢字関連文字は、中国の周辺に位置する過去と現在の文字のうち、ベトナムの字喃(チュー・ノム)や日本の仮名など漢字から作られた漢字系文字、遼の契丹文字や西夏の西夏文字や金の女真文字など漢字に似せて創製された擬似漢字系文字、モンゴル時代のパスパ文字や李朝時代のハングルなど漢字と系統を異にするが関連のある非漢字系文字からなる。これは文字の系統分類ではない。文字組織全体から見た漢字との関連性によって分類したものである。ここで言う文字組織は、①字形を形作る文字要素と文字、②文字要素を組み合わせて文字を作る方法、③文字を互いに区別したり同類にまとめたりする方法[3]、④表意と表音の方法、⑤縦書き・横書き・分ち書きなどの文字配列法よりなる。なお、この枠組みの特徴は非漢字系の文字を積極的に取り込む点にある。

1 『書道研究 特集：漢字周辺文字の研究』（美術新聞社）1987:9 の巻頭地図参照。

2 吉池孝一 2006「中国周辺の漢字関連文字について」『KOTONOHA』48 号、23-27 頁参照。

2. 漢字系文字

漢字系文字は、漢字が備える字形・字音・字義をそのまま用いるのではなく、いずれかを変え、自己の言語の表記に利用したものを指す。利用の仕方により変用、変形、派生の三種をたてる[4]。なお、この用語と用法は西田龍雄 2002 による[5]。

2.1. 変用による文字

変用文字は、既存の漢字の字形と字音を利用したもの（仮借）、及び字形と字義を利用したもの（訓読）が基本である。日本の『古事記』や『万葉集』（ともに 8 世紀）に使用された万葉仮名がそれにあたる。「波流」という漢字の音を借りて日本語の「はる（春）」を表わす音仮名や、漢字の訓読より発した「八（ヤ）間（マ）跡（ト）」を用いて日本語の「やまと（大和）」を表わす訓仮名は[6]、変用の典型である。

2.2. 変形による文字

変形文字は、漢字の要素を組み換えたもの、及び筆画を増減したものである。変形を加えているが一見して漢字系統の文字であることがわかる。ベトナムの字喃は変形文字が充実しており、この文字を持つ典型としうる。字喃は 10～11 世紀に組織化され 20 世紀初頭まで使用された。「巴」（字音）と「三」（字義）を組みあわせて「𠀧」を作りベトナム語の

3 文字の区別（示差）として、平仮名の「ろ」と「る」、「わ」と「ね」、「め」と「ぬ」などが同じ手順で区別されていることを挙げることができる。この指摘は西田龍雄 1987「漢字の生成発展と“擬似漢字”の諸相」『書道研究』（1987:9、31-41 頁）にある。文字を同類にまとめる（示同）方法として「だ、ば、が」などの濁点がある。このような示差と示同の機能により文字組織の一部である字形は緩やかな体系をなしている。

4 吉池孝一 2006「中国周辺の漢字系文字」『KOTONOHA』49 号、25-30 頁参照。

5 西田龍雄 2002『アジア古代文字の解読』（中央公論新社。もと『アジアの未解読文字』大修館書店、1982 年）の付記（281-282 頁）は東アジアの漢字系文字を五種に分類する。1.正統漢字（漢語を表記するために造られた文字。時代とともに字形と字数は変遷を重ねた）。2. 変用漢字（正統漢字の字形を表音的に、或は全く別の音価や意味を与えて使う文字）：哈尼族、侗族、傈僳族など。3. 変形漢字（正統漢字の偏・旁・冠などを自己の言語形に適合させて組み改め、変形した文字）：字喃、壮方塊字、苗文字など。4. 派生漢字（正統漢字の字形をもとに、それをくずして新しい字形を造り出した文字）：仮名、女書。5.擬似漢字（正統漢字の字形または構成原理を模倣して、新しく創造した文字）：契丹文字、西夏文字、女真文字。

6 鶴　久 1977「万葉仮名」『岩波講座 日本語 8　文字』岩波書店、209-248 頁、の用例による。

[ba]（数字の三）を、「天」（字義）と「上」（字義）を組み合わせ「⿰天上」を作りベトナム語の[cəi]（空）を表わす[7]。

2.3. 派生による文字

派生文字は、漢字の字形を改変して作った新しい文字である。漢字の字形とは似ておらず、解釈を経た後に漢字との字形上の関係が判明する。周辺民族の言語を記したものは当然として漢語を記したものも含める。前者に日本の仮名があり、後者に中国湖南省の女書(ニョショ)がある。

日本の仮名には、万葉仮名の草書体より発展した平仮名と、万葉仮名の部分より発展した片仮名がある。「安、以」などの草書化より「あ、い」などが、「阿、伊」などの偏より「ア、イ」などができた。共に９世紀から資料がある[8]。これらは、日本語の音節を表わす文字として組織された。文字が意味を担うことはない。

女書は中国湖南省の漢語方言を表記したもので、当地の女性だけが使用することより、女書と呼ばれる。外形は縦長の菱形で、やや右に傾いている。字数は異体字を含め約 3,600。字形の由来と文字発生の時期については諸説あるが、約 600 の漢字楷書体に基づき、明末清初から清代中期頃に発生し今に至ったとする説[9]が穏当であろう。一字は一音節で、縦に右から左に綴り意味の切れ目を明示しない点は漢字と同様であるが、その字形は漢字に似ておらず、音節の利用の仕方も漢字とは異なる。同音および近似音の音節の間で文字の仮借が頻繁に繰り返された結果、特定の字義を担う働きが弱まり、日本の仮名のような音節を表わす表音文字の様相を呈することとなったのであろう。漢字漢文が行われる中、なぜこの様な文字組織が生まれたのかということについては今後の研究に待ちたい[10]。

2.4. 中国少数民族の漢字系文字

変用、変形、派生による文字のうち、変用・変形文字は中国周辺の少数民族の間で広く用いられた。①中国の湖南省・広西壮族自治区・貴州省一帯の侗(カム)族は、「消」という漢字の音を借りて侗語の [ɕa:u]（あなたたち）を表わし、「風」という漢字の意味を利用してこれを侗語の [ləm]（風）で読んだ。前者が仮借で後者は訓読である。変用による文字ということになる。侗族の文字は変用文字が主体であることから、上図では変用の下に収めたが次のように変形文字も用いる。意味を表わす人偏「亻」と発音を表わす「不」

7 冨田建次 2001「チュー・ノム（字喃）」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001 年、611-618 頁参照。
8 築島　裕 2001「仮名」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001 年、228-235 頁参照。
9 陳其光 2006『女漢字典』中央民族大学出版社を参照。
10 陳其光 2006 に興味深い説がある。女書は、宋代以降打ち続いた当地の義軍（瑶族、漢族、他の少数民族を含んでいた）と中央政府との抗争の間において、秘密保持の為に義軍方によって作られ使用されたものであったが、後に使用範囲が縮小し、女性だけが使用するようになったという。

を組み合わせて新たな文字「⿰亻不」を作り、侗語の[pu]（父）を表わす。なお、この文字資料の初出は明末清初であり、今でも使用される[11]。②中国雲南省の哈尼(ハニ)族の文字がある。一般に使用された文字ではなく、20 世紀中頃以前とされる資料が僅かながらある[12]。③広西壮族自治区の壮(チュワン)族の文字。古くは唐代に遡る資料がある。文学作品をはじめ多方面にわたる資料があり、今でも使用される[13]。④中国湖南省の苗(ミャオ)族の文字。清末に苗族の知識人が考案した文字で、今でも相当に広い範囲で使用される[14]。⑤中国貴州省の布依(プイ)族の文字。変用文字が主体であるが 80 字ほどの変形文字も報告されている[15]。⑥中国雲南省の白(ハク)族の文字。古くは唐代に発し今でも使用される。この文字は変用・変形文字であるが、時代が下るに従って変形文字の使用範囲は縮小し、逆に変用文字の仮借の用法が増えるという興味深い傾向がある[16]。さらには⑦雲南省・広西壮族自治区一帯の瑶(ヤオ)族の文字がある[17]。

これらの中国少数民族は変用文字と変形文字を併用する。その言語は漢語と同様に単音節主体の形態素（最も小さな意味の単位）となっているため、漢字漢文利用の延長として自然に変用・変形文字の利用に至ったのであろう。

2.5. 漢字系文字の分布

漢字系文字を使用する地域は中国周辺の南方一帯に偏っている。これは、北に複音節主体の形態素を持つモンゴル語や満洲語や朝鮮語などがあり、南に単音節主体の形態素を持つ中国少数民族の言語やベトナム語があることと無関係ではない。北方の諸民族も当初は漢字漢文を利用していた。その後、モンゴル系とされる契丹は契丹大字を作り、ツングース系とされる金は女真文字を作った。これらは擬似漢字系の文字であるが、漢字系の変用・変形文字も含んでいる。このように漢字系文字を利用する例もあるが、北方の諸民族は概して漢字系の変用・変形文字を発展させることはなく、ソグド文字に発するウイグル文字・モンゴル文字・満洲文字・シボ文字を使用した。ソグド系の文字は単音を表わす表音文字である。複音節主体の形態素を持つ言葉を話す北方諸民族にとって、漢字系文字よりもソグド系の表音文字の方が、はるかに利用し易かったのであろう。

11 梁　敏 1980『侗語簡誌』民族出版社、89 頁参照。および、趙麗明 1991「漢字侗文與方塊侗字」『中国民族古文字研究』天津古籍出版社、215-220 頁参照。
12 李永燧・王尓松 1986『哈尼語簡誌』民族出版社、152 頁参照。
13 梁庭望 1991「古壮字及其文献新探」『中国民族古文字研究（第三輯）』天津古籍出版社、150-164 頁参照。
14 西田龍雄 2001「東アジアの諸文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001 年、782-799 頁参照。
15 呉慶禄 1991「布依族古籍中的方塊布依字」『中国民族古文字研究（第三輯）』天津古籍出版社、230-244 頁参照。
16 王鋒 1996「方塊白文的歷史発展和現状」『中国民族古文字研究（第四輯）』天津古籍出版社、225-237 頁参照。
17 周有光 1989「漢字文化圏的文字演変」『民族語文』1989 年第 1 期、37-55 頁参照。

一方、南方の中国少数民族の間で使用された漢字系文字も、1950年代以降は新中国の政策によりラテン系文字が正式な文字として採用されたため、現在ではラテン系文字に取って代わられる趨勢にある[18]。隣国のベトナムでも漢字系文字の字喃からラテン系文字に切り替わっており、漢字系の変用・変形文字の使用範囲は急速に縮小している。

3. 擬似漢字系文字

擬似漢字系文字は漢字に似せて作られた新しい文字である[19]。雑多な文字の集積という面があり、漢字系文字とも非漢字系文字ともし得ないものを一括して入れておく便利な枠組みともなる。まずは遼の契丹文字、西夏の西夏文字、金の女真文字を挙げることができる。これらの文字は10世紀から12世紀にかけて東アジアの北側の地域において創製された国定の文字である[20]。国が滅ぶと共に文字使用の伝統も絶え、解読が必要な文字として今に至った。その他に、中国貴州省水(スイ)族の文字、中国雲南省傈僳(リス)族の文字も加える。こちらは最近まで使用されていた文字である。

3.1. 契丹文字

10世紀の初め遼（916～1125年）で契丹文字が作られた。契丹文字には大字と小字の二種があり、この文字でモンゴル系の契丹語が記された。先ず大字が作られ次いで小字が作られた。

契丹大字は遼の太祖阿保機(アボキ)が920年に公布した表意文字で、漢字の俗字体の筆画を増減して作ったものである。その数1,800余り。漢字をそのまま利用したもの約1/5、筆画を増減して作ったもの、漢字を組み合わせて作ったものもある。これらは漢字系文字である[21]。その他に、漢字との関係を明示し得ない文字が多数ある。解読にあたり、契丹大字文と漢字漢文が併記された碑文を利用する。また金の女真文字には大字を参考にした部分があるため、漢字と女真文字を参照する方法も採られる。表意文字の場合、一字一字につき音と意味を解明しなければならず、よほど条件が良くないと全面的な解読は難しい。大字はほんの僅かしか解読されていない[22]。

18 中国社会科学院民族研究所主編 1992『中国少数民族文字』中国蔵学出版社を参照。
19 吉池孝一 2007「中国周辺の擬似漢字系文字」『KOTONOHA』50号、1-6頁参照。
20 契丹文字、西夏文字、女真文字の史書における位置づけは白鳥庫吉 1898「契丹女真西夏文字考」『史学雑誌』第九編第十一・十二号（『白鳥庫吉全集 第五巻 塞外民族史研究 下』（岩波書店、1970年）所収に負うところが大きい。
21 『遼史』巻二「本紀」に「五年（920）春正月乙丑始製契丹大字、・・・九月・・・壬寅大字成、詔頒行之。」とある。『新五代史』巻七十二「四夷附録第一」に「至阿保機、稍并服旁諸小國、而多用漢人、漢人教之以隷書之半増損之、作文字數千、以代刻木之約」とある。ここで言う「隷書」は聶鴻音 1999「契丹大字解読淺議」『民族語文』（1999年第4期、51-57頁）によると伝統的な隷書ではなく当時通行していた漢字の俗字体を指す。漢字系文字として、例えば「皇帝」「仁」など漢字をそのまま利用したもの、「大」字に筆画を増して作字し『大きい』を表わしたもの、「馬」字の筆画を減じて作字し『馬』を表わしたもの、「天」と「土」を組み合わせて『天』を表わしたものなどがある。
22 劉鳳翥 1998「契丹大字六十年之研究」『中国文化研究所学報』(香港中文大学) 1998年、新第7期、313-338

契丹小字は太祖の弟迭剌(テツラツ)がウイグル文字の組織に学んで作った文字である。字数少なくして通用し得るという[23]。大字公布より数年の後に作られた[24]。単音または音節を表音的に表わす基本字が380ほどある。これをハングルのように左右上下に組み合わせ、正方形や縦長の長方形に外形をまとめあげて一つの単位とする。その際、語幹に連接する接尾辞は連書されて、一つの単位となる。この単位は、意味の切れ目に対応しており、分ち書きの役目を果たす。分ち書きはウイグルの文字組織に学んだものであろう。基本字の字形は漢字や契丹大字に似ている部分もあるが、その由来について定説はない。基本字を綴り合わせて語音を表記するので、糸口さえ掴めれば次々と文字の音を明らかにすることができる。碑文には漢語の人名や官職名などを小字で音写した部分があり、これを糸口にして小字の研究はだいぶ進んでいる[25]。小字による借用漢語の音写の法も時代を下るに従って次第に精密になるという興味深い現象もみられる[26]。ただし、契丹語を記した部分の解読が難しく、既に滅んでしまった契丹語を構築しながら解読を進めているという状況である。なお、小字には篆書体がある。これは漢字篆書体に学んだものである。

3.2. 西夏文字

11世紀には西夏文字が作られた。初代皇帝の李元昊が、大臣の野利仁栄らに作らせ西夏（1038～1227年）建国の直前1036年に公布した文字である[27]。チベット系の西夏語を記した表意文字であり、文字を方形にまとめ縦に右から左に綴る点は漢字のような印象を与えるが、その文字要素は漢字とは似ていない。文字要素を組み合わせて文字を作る方法は漢字を模したものとされる。篆書体もあり、これは漢字篆書体に学んだものである。先に表意文字は条件が良くないと全面的な解読には至らないと言った。西夏文字の場合、字典や韻書に始まり様々な資料が残っている。その中でも西夏語と漢語の対訳語彙集である『番漢合時掌中珠』(1190年)は初期の解読にとって極めて有用であった。解読にとって理想的な条件の下にあったため研究は急速に進み[28]、6,000余りの文字はほとんど解読され今では

頁に全資料の模写と解説がある。
23 『遼史』巻六十四「皇子表」に「回鶻使至、無能通其語者。太后謂太祖曰、迭剌聰敏可使。遣迓之。相従二旬、能習其言與書、因制契丹小字、數少而該貫。」とある。
24 注20の白鳥庫吉 1898はウイグルの使者の来貢年より推し天賛三年（924）か天賛四年（925）とする。
25 清格爾泰他 1985『契丹小字研究』中国社会科学出版社を参照。
26 吉池孝一 2003「漢語の精母系子音を表わす契丹小字について」(2003.12,18-21頁)、2004a「止摂開口精母系の漢語音を表わす契丹小字について」(2004.1,11-14頁)、2004b「止摂開口荘章母系の漢語音を表わす契丹小字について」(2004.2,11-14頁)『KOTONOHA』13,14,15号を参照。
27 『宋史』巻四百八十五「夏國上」に「元昊自制蕃書、命野利仁榮演繹之、成十二卷、字形體方整類八分、而書頗重複。・・・・復改元大慶宋寶慶元年（1036）。」とある。「蕃書」とは西夏文字のことである。元昊が作り、野利仁榮に整えさせたとあるが、李錫厚・白濱・周峰 2005『遼西夏金史研究』（福建人民出版社、125頁）にみえるように、元昊の主催の下、野利仁榮らによって作られたとするのが穏当であろう。
28 西田龍雄 1997『西夏王国の言語と文化』岩波書店を参照。

7 世紀前半の西トルキスタンでは縦書きであったとする玄奘の証言は貴重である。なぜ縦書きが現れたか、定説はないようであるが、これを漢字漢文の影響とする見方もある[38]。そのため漢字関連文字としたが、適否は後の課題である。

次のウイグル文字（9〜14 世紀）になると、初期のものを除き大部分は縦書きされるという[39]。縦書きであるのは、7 世紀前半以降の西トルキスタンのソグド文字の習慣によったものと考えてよいのであろう。縦書きといっても行の方向は漢字漢文とは逆で、左から右に進む。これ以降のソグド系文字は全て縦に左から右に綴られた。その結果として、書物や碑文の上でソグド系文字文と漢字漢文を併記することが容易になった。

なお満洲文字（17〜20 世紀）には篆書体もある[40]。未だ精査していないが、ソグド系の諸文字のうち、篆書体を持つのは満洲文字だけであるようにおもう。これも漢字篆書体に学んだものである。

4. 2. パスパ文字

13 世紀にはパスパ文字[41]が作られた。フビライがチベット僧パスパに命じて作らせ、元（1271〜1368 年）建国の直前 1269 年に公布したものである。フビライ統治下の諸言語を表記するためと言われる[42]。これまでにモンゴル語、漢語、チュルク語、チベット語、サンスクリット語を記したものが発見されているが、現存する資料の大半はモンゴル語と漢語である。チベット文字を漢字風に角ばらせて作った文字で、単音を表わす表音文字となっている。字形を方形にまとめる点、一音節毎の切れ目はあるが単語など意味の切れ目に対応した分ち書きがない点は漢字の影響である。縦に左から右に綴る点はモンゴル文字の影響である。モンゴル人は、パスパ文字を作る前より、ウイグル文字に発するモンゴル文字（ウイグル式モンゴル文字ともいう）で自分達の言葉を書いていた。パスパ文字作製後は、文字をパスパ文字に置き換えて文章を綴った。結果としてモンゴル文字より書写の方向を受け継ぐこととなった。パスパ文字は元一代に渡って使用され、元の滅亡とともに公

那国に至るまで、地は窣利と名づけ、人も亦しか謂う。文字･語言は即ち随って称す。字源は簡略にして本二十余言。転じて相生じ、其の流れ浸く広し。粗書記有り、堅に其の文を読む。」（286 頁）とある。注には「ソグド文字はシリアのアラム文字を基にした文字であり、このソグド文字からウイグル文字が案出された。通常横書きされるが、玄奘のいう「その文を竪読みする」書き方もあった。」（59-60 頁）とある。注は「書き方もあった」とするが、『大唐西域記』の表現をみるかぎり、玄奘が訪れた西トルキスタンでは普通には縦に書かれたということであろう。

38 庄垣内正弘 2001「ウイグル文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001 年、118-121 頁参照。

39 注 38 の庄垣内正弘 2001 を参照。

40 汪玉明 1993, 1996「満文篆字研究（上）（下）」『中国民族古文字研究（第二輯）（第三輯）』天津古籍出版社、288-290 頁（上）、43-63（下）頁参照。

41 パクパ文字とも称される。吉池孝一 2005「パスパとパクパ」『KOTONOHA』30 号、8-12 頁参照。

42 『元史』巻二百二「釈老伝」に「帝師八思巴者、土番薩斯迦人、・・・。中統元年、世祖即位。尊爲國師、授以玉印。命製蒙古新字。字成上之。・・・。至元六年、詔頒行於天下。詔曰「・・・。故特命國師八思巴、創蒙古新字、譯寫一切文字、期於順言達事而已。自今以往、凡有璽書頒降者、並用蒙古新字、仍各以其國字副之。」・・・」とある。

式には文字使用の伝統も絶え、解読の必要な文字となった。解読といっても、チベット文字の知識とこの文字の歴史的な背景に対する理解があれば比較的容易であったため、19 世紀中頃にはヨーロッパ人によって本格的な解読がなされていた[43]。なお、パスパ文字には篆書体がある。これも漢字篆書体に学んだものである。

4. 3. ハングル

15 世紀にはハングルが作られた。李氏朝鮮の第四代世宗の命によって 1443 年に作られ 1446 年に公布された。字母は単音を表わす表音文字であるが、それを音節単位に組み合わせる。表音文字であるところはパスパ文字などに原理を学び、音節毎に組み合わせて文字単位をなすところは漢字に学んだとされる[44]。なお初期のハングルが縦に右から左に綴られた点、一音節毎の切れ目はあるが単語など意味の切れ目に対応する分ち書きがなかった点も漢字組織の影響であろう。

5. おわりに

以上、中国周辺の漢字関連文字を概観したが、周有光 1989[45]には類似の文字の枠組みが既にある。周有光 1989 は、字形の系統、文字を構成する点画の用法、方形であるか否かという文字の外形によって、東アジアの 19 種の文字[46]を「漢字式文字」としてまとめ、その発展を論じた。字形の系統だけでなく文字の形式も含めて枠組みを設定したところは、西田龍雄 1981[47]と同様である。そこに含めた文字の範囲は西田龍雄 1981 より一層広くなっているが[48]、これもやはり系統分類の一種であろう。

本稿で扱った文字種は周有光 1989 と大差ないが、漢字関連文字は文字の系統分類ではない。漢字に由来する文字は当然のこととして漢字と関連のある異系統の文字もできる限り取り込む。この枠組みは、周辺の民族がどの様に漢字に近づき、どの様に漢字から離れたかという問題を検討するために設けたものである。異なる民族の接触から何が生れたか文字組織をとおして見てみよう、ということでもある。

---

43 中村雅之 2006「パスパ文字漢語研究の黎明—19 世紀西洋人の研究」『KOTONOHA』46 号、1-3 頁参照。

44 大江孝男 2001「東アジアの諸文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001 年、760-773 頁）を参照。なお、ハングルの成立にあたって、何を参照したかという点につき、パスパ文字説と契丹小字説がある。古くは白鳥庫吉 1897「吏道・諺文」『史学雑誌』第八編第一号（『白鳥庫吉全集 第三巻 朝鮮史研究』岩波書店、1970 年所収、107-113 頁）にパスパ文字説がある。Alexander Wylie.1859, “On an Ancient Inscription in the Neu-chih language,” *JRAS VI*,1859 ,pp.137-153）に契丹小字説がある。もっとも後者は契丹小字を女真文字と誤解する。

45 注 17 の周有光 1989 を参照。

46 漢語漢字、江永婦女字（女書）、壮字、布依字、侗字、水字、白字、哈尼字、彝字、僳僳字、瑶字、苗字、西夏字、契丹大字、契丹小字、女真字、朝鮮文（ハングル）、喃字、日文。

47 西田龍雄 1981「東アジアの文字」『講座言語 第５巻 世界の文字』西田龍雄編、大修館書店、216-278 頁参照。漢字系文字の中に契丹文字、西夏文字、女真文字を加える。

48 この構想は早くは周有光 1987「漢字文化の歴史と将来」（『漢字民族の決断—漢字の未来に向けて』橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編著、大修館書店）の附註に見える。

『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』正誤表

頁	行	誤	正
56	注 11	以其有□ 有槽	以其有鞅有槽
109	13	「何N」と「V何N」の間	「何V」と「V何N」の間
114	7	(4-18) ニ (4-20) は	(4-19) (4-20) は
114	21	「疑問代詞目的語＋助動詞＋動詞」	「助動詞＋疑問代詞目的語＋動詞」
123	32	葉群 2001	葉軍 2001
128	24	決定でき	決定す
144	1, 3	『説文解字訓林』	『説文解字詁林』
144	17	「紇 huíhé」	「紇 hé」
189	26	でなく__声母	でなく ʂ- 声母
194	15	単子音__の表記	単子音 ʂ の表記
236	注 6	意味論的または語用論的に	語用論的に
240	32	much, Either.	much, either.
241	2	都吃了。	都吃完了。
241	4	饭呢，都吃了？	饭呢，都吃完了。
241	6	饭都吃了？	饭都吃完了。
242	13	甲：要是吃窝头，	乙：要是吃窝头，
243	29	(32b 乙) も同様	(31b 乙) も同様
奥付	編者	佐藤進教授還暦記念中国語学論集	佐藤進教授還暦記念中国語学論集刊行会

目　次

佐藤進先生近影		
耳順回顧	佐藤　進	*1*
略歴		*6*
研究業績一覧		*8*
論揚雄《方言》的歴代整理——爲賀佐藤進教授六十華誕而作	華　學誠	*14*
説“膜拜”	朱　慶之	*40*
中古近代漢語新詞的産生方式之一——修辭手法造詞	方　一新	*51*
楚簡における第一口蓋音化に関わる幾つかの声符について	大西　克也	*62*
“寸”、“丌”、“秋”字から見た古文字簡化に関する一考察	戸内　俊介	*77*
『国語』版本考—公序本と明道本—	小方　伴子	*86*
馮勝利氏の韻律文法理論について —古漢語疑問代詞目的語語順変化についての馮説の検討—	松江　崇	*100*
唇音下字反切の開合問題	太田　斎	*125*
『類篇』は何のために編まれたか	水谷　誠	*145*
漢字関連文字の諸相	吉池　孝一	*154*
論《老乞大》四種版本中所見的量詞演變	竹越　孝	*164*
《逆臣録》における複数を表す一人称代名詞について	槇　美貴江	*174*
甲種本『華夷訳語』音訳漢字の基礎方言の問題	更科　慎一	*186*
近世漢語資料における軽声表示	中村　雅之	*199*
《日本風土記》所記日語對音反映的十六世紀呉語語音	丁　鋒	*204*
張自烈『芑山詩集』について	古屋　昭弘	*215*
変化主体を表す目的語名詞句の意味役割	石村　広	*224*
中国語の条件文における副詞“就／才”の役割 —コピュラ文の解釈を手がかりに—	下地早智子	*235*
漢語諸方言における禽獣の類別詞について—トリ・ウシ・ブタ・ウマ の類別詞と禽獣類別タイプの関係を中心に—	中川　裕三	*246*
広西三江六甲話の人称代名詞について	工藤　早恵	*265*
桂南平話における入声字の分調について	植屋　高史	*275*
西雙版納漢語景洪市區中青年音系簡介	竹越美奈子	*285*
卑南語知本方言中的音韻年齢差異—近期産生的音韻變化個案研究—	遠藤　光暁	*297*
長江流域における Sibilants 声母体系の一類型	岩田　礼	*303*
あとがき	遠藤　光暁	*314*
執筆者一覧		*315*

あとがき

遠藤　光暁

東京都立大学は日本の中国語学の研究者養成機関としてたいへんユニークな存在であった。すなわち，その大学院においては学部の出身校・出身学部をはじめとして従前の経歴に一切こだわらず，中国語学に志す全国のさまざまな傾向の学生を積極的に受け入れ，そして誰もがのびのびと勉学を行い，すぐれた研究者がどんどん育っていった。

佐藤進先生はその中にあってそうした研究者の卵たちを専門分野を問わず庇護し，おのおのが自由な発想に基づき伸びていくことを見守られていた。だが，ことご専門とする古代漢語に関しては学生を甘やかすことなく真剣勝負で臨まれていたように見受けられる。

私自身は佐藤先生に教室で教わることはなかったが，岩田礼さん・平田昌司さんが主宰しておられた漢語方言に関するプロジェクトを通して識り合うことを得て，そしてそれに続く私が代表者となったプロジェクトにおいては揚雄『方言』の会読の主導者をお願いし，その後も『礼記』「緇衣」の戦国文字資料による会読において多くのことを教わることを得た。また，学問的な面のみならず，人格的な面でも佐藤先生の安定したお人柄に訓育されることが多く，ほかパソコンなど日常的なことでも何かにつけお世話になってきた。

佐藤先生が還暦をお迎えになることをお聞きしたのは2006年4月の「緇衣」会読の後の宴席の場であり，その場で何かお祝いをしましょう，と申し上げたのだが，連休頃にやはり記念論文集を出すのが最もふさわしいと考え，先生とゆかりのある古屋昭弘，松江崇，落合守和，小方伴子，小野秀樹，大西克也，太田斎，竹越美奈子，竹越孝そして私といった顔ぶれで『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』刊行会を作り，会読のメンバー，都立大での受業生，佐藤先生と縁の深い中国の古代漢語研究者といった範囲で寄稿を呼びかけた。その際，2006年度後半は私の在外研究期間にあたっていて実務を行うことが不可能であるため，論文集の出版に関しては竹越孝・竹越美奈子の両氏，還暦祝賀会に関しては小方伴子・松江崇の両氏に幹事をお願いしたところ，いずれの方もただちに快諾され，進んで事にあたる旨申し出られたのは心強いことであった。そして，事情により結局論文を寄せることができなかった方もおられるものの，ここに見るような論文集を佐藤進先生に献ずることができる運びとなったことは大きな喜びである。

東京都立大学は改組により今はもうその名を史冊に留めるのみであり，佐藤先生もそれと時を同じくして二松学舎大学に移られた。しかし，都立大のgood old daysの中で育まれた者が今や中堅・新進研究者として全国で活躍している。そして都立大出身者のもう一つの美点は閥をなさず覇を唱えないことであり，こうした者たちは今後も数十年にわたり日本の中国語学に対して良好な影響を与えていくことであろう。

佐藤進先生におかれてはこれからもますますご自身の研究を深められるとともに，引き続きその大きな度量を以って後進の者をご指導くださるよう祈念している。幸い術後の経過も良好であるとお聞きしており，ご健康に留意されつつも今後もその学識の蘊奥を存分に開陳せられることを願ってやまない。

執筆者一覧

華　學誠	北京語言大学
朱　慶之	北京大学
方　一新	浙江大学
大西　克也	東京大学
戸内　俊介	東京大学（院）
小方　伴子	首都大学東京
松江　崇	北海道大学
太田　斎	神戸市外国語大学
水谷　誠	創価大学
吉池　孝一	愛知県立大学
竹越　孝	愛知県立大学
槇　美貴江	東京都立大学（院）
更科　慎一	山口大学
中村　雅之	
丁　鋒	大東文化大学
古屋　昭弘	早稲田大学
石村　広	成城大学
下地早智子	神戸市外国語大学
中川　裕三	天理大学
工藤　早恵	青山学院大学（非）
植屋　高史	群馬県立女子大学（非）
竹越美奈子	愛知東邦大学
遠藤　光暁	青山学院大学
岩田　礼	金沢大学

佐藤進教授還暦記念
中国語学論集

■発行日　2007年4月12日
■編者　佐藤進教授還暦記念中国語学論集
■発行人　尾方敏裕
■発行所　株式会社 好文出版
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町540 林ビル3F
電話 03-5273-2739
Fax. 03-5273-2740
http://www.kohbun.co.jp
■装丁　関原直子
■印刷製本　音羽印刷株式会社
■制作　日本学術書出版機構(JAPO)

© 2007 Printed in Japan ISBN978-4-87220-113-0